

<櫻田會通信>

ポーランド便り① 「遠くて近いポーランド」

大東文化大学法学部
政治学科教授

武田 知己

一般財団法人櫻田会のウェブサイト上で、雑文を書かせていただく機会を頂戴した。私は、今、勤務先の大学から在外研修(いわゆるサバチカル)の許しを得て、ポーランドの首都・ワルシャワにいる。ワルシャワ大学東洋学部日本学科の訪問研究員として、日本の来し方・行く末を、今までとは少し違った角度から考えてみたいと思っている。今はその冒険を心から楽しんでいる途中だ(写真はワルシャワ大学正門。2023年4月撮影)。



ところで、私はポーランドの専門家ではない。20世紀の日本政治・外交史の研究を専門としている歴史家である。ポーランドには、2018年に一度国際会議に参加した際に訪れた程度の関わりしかない。なのに、何故、ポーランドにいるのか。理由は大きく三つある。

一つは、実はポーランドは隠れた「親日国」である。日本の大学でポーランド語学科をもつのは二つ程度だと聞いているが、日本の人口の半分もないポーランドでは、ワルシャワ大学の外にも、ヤゲロン大学、アダム・ミツキエヴィッチ大学、コペルニクス大学などで日本語教育を行っている。日本の人口の半分以下の国でこれだけ熱心な教育を行っている事は驚くべき事である。ワルシャワ大学東洋学部では日本語学科は最

大規模で、2023年10月から新キャンパス(ワルシャワセントラル駅からほど近いホジャ69/Hoża69にある)で新しい学期をスタートさせた。入学倍率は20倍というから驚きである。なぜ、ポーランドは日本にこんなに親近感を持ってきているのか。その秘密を探ってみたいというのが一つだ。

二つ目の理由は、ウクライナ戦争が起きたことである。実は2022年2月24日以前から二度目の在外研究はポーランドと決めて打診もしていた。コロナや家庭の事情で延期になった結果、2023年度の在外研修になったのであって、戦争勃発は偶然であった。2022年末ごろに正式な許可が出てから、何人かの友人や家族がポーランドに行って本当に大丈夫なのかとかなり真剣に心配してくれた。ポーランドは、確かにウクライナ戦争における「西側」の最前線に位置する。遠いアジアから見れば、ウクライナとポーランドの境はないに等しいのかもしれないが、私の友人に聞いても特に問題なく研究し生活している。実際、この夏には私の子供も遊びに来たし、学界の友人も数人遊びに来てくれた。ポーランドにいて身の危険を感じる事は今のところほとんど全くない。しかし、戦地の近くに居るという感覚は、やはり私の研修滞在に特別な意味を与えている。この機会に、文字通り、変動期にある国際政治や安全保障の行方について考えてみたいと思っている。



三つ目の理由は、上記の理由とも重なるが、ポーランドと日本の地政学的な位置を比較してみたいと言う事である。上述のように、21世紀にユーラシア大陸の西側で起きた戦争によって、ポーランドは西側諸国の最前線に立った。ポーランドは民主化以降「ヨーロッパ」に回帰したが、ポーランドに米軍が駐在するような事態は、ウクライナで戦争が起きなければ(それは2022年ではなく2014年から始まった)おそらく予想し得なかつただろう。だが、それまでのポーランドは、実は大国政治の狭間でずっと埋もれてきた国であった。そんな国が国際政局の「重心」(center of gravity)となったのは本当に感慨深い。

もっとも、地政学とは地理的要因だけを重視する発想ではない。その地域の歴史的経験も地政学上重要な意味を持つ。ポーランドを考えるに当たってまず重要なのは、バルト諸国と並び、ポーランドが世界で最も「反ロシア」感情の強い国であることだ。それはポーランドの歴史を紐解けば理解できることである。ポーランドは、ハプスブルグとも異なる独自の文化圏を有し、独自の帝国を築いた誇り高き国であった。しかし、ドイツとロシアの狭間にあるポーランドは、20世紀において自らを二大国の間、そしてその対立を取り巻く国際政治の中間で、自らを埋没させてきた。特に、第二次世界大戦においてソ連の勢力圏の中に取り込まれる事をイギリス・アメリカが容認したことはその後のポーランドの歴史を大きく変えてしまった。

しかし、ポーランドは、18世紀末にフランスに先駆けて成文憲法を制定し、議会制を基礎とした統治を行った立憲政治の先進国の一つであった。第2に重要なのはこの点である。もし、123年もの間国家が消滅するという事態にならなければ、またその後第一次大戦を経て独立を獲得した後に第二次世界大戦期に大国間政治の取引としてその国境を操作される悲劇がなければ、そしてナチスドイツの支配を蹴散らしたソ連共産主義がポーランドを間接的に支配する事がなければ、ポーランドは順調に中東欧のデモクラシー先進国たりえたかも知れな

いのである。冷戦時代のポーランドは、他国に先駆けてソ連の頸木から逃れようとした歴史を有しているのは、そういったポーランド魂の清華だ。特に、1980年代の東欧革命の先陣を切った歴史は、現在、ポーランドが西側にとって地政学的に重要となった理由の一つと言えよう。

翻って、昨今懸念されているように、もしユーラシア大陸の東側でも紛争が起きたとしたらどうなるだろうか。極東と言われるその地域で紛争が起きた場合、その西側の最前線は、既に米軍が駐在している韓国となるだろう。いや、NATOの事務所が将来的に置かれるかも知れない我が国日本が、権威主義国家がひしめく最も危険な地域などとも形容されるこの地域の「重心」となるかも知れない。ポーランドの経験は、東アジアで起こり得る未来に対する参考としての意味もあるのではないか、というのが私の第3の関心にある。もっとも、日本は、ポーランドと異なり、幸いにして国家滅亡の経験を有しない。また、戦後は、アメリカという世界史上最強の軍事大国と早くから同盟を結ぶことができた。しかし、そういった相違よりも、立憲政治の先進国であり、その意味で自由主義諸国の一員としてアジアの代表格としての地位にあり、同時に中国とアメリカという、ドイツやロシアに勝るとはいえ劣ることのない大国からの強い影響を受けざるを得ない狭間にある我が国とポーランドのそれとの間には、どこか共通するところがあるのではないか。



そういう気持ちから、ポーランドに来てポーランドという国、ポーランド人の歴史そのものへの強い関心も持ち始めた。8月には、予定になかったポーランド語の学校にも一ヶ月通ったほどである。また、ポーランドの食事にも口に合うようで何を食べてもおいしい。一般の日本人の口に合う食事も少なくないように思う(写真は、ポーランド料理のレストランにて撮影、2023年6月)。

実際、日ポ関係は、急速に親密度を増しているように思える。我が国の首相も、2023年1月から9月までに限っても、3月と7月の2度に亘ってこの国を訪れているし、外務大臣も4月と9月にポーランドを訪れた。G7サミット前の5月には、ポーランドの外相が日本を訪問している。特に、3月の訪問に当たって、所得水準の高いポーランドをODA対象国とし、ポーランドのウクライナ支援を間接的に援助する異例の措置をとった。この戦争を通じて、ポーランドは、日本にとって一層近い国となっているようだ。このことも、私のポーランドへの興味を増加させている。

歴史的にも政治的にも大変面白いこの国のことを、この際だからいろいろ欲張って考えてみたい、そう思うようになった。しかも、今から丁度一週間後には、4年ぶりの総選挙が行われる。願ってもないことなので、少しいろんな事に顔を出してみよう。私がポーランド政治の研究者でないことは、むしろ偏見なく歴史と現状を考える上で有利かも知れない。私なりに

感じたことを、少し大胆に書いてみたいと思う。

2023年10月7日

<参考>

- ・外務省ホームページ「ポーランド共和国」
- ・国際交流基金ホームページ「日本語教育 国・地域別情報:ポーランド 2020年度」
- ・岡崎恒夫『ワルシャワ便り』(未知谷、2019年)